

平成26年度 鹿児島大学 FD報告書



鹿児島大学FD委員会
KAGOSHIMA UNIVERSITY Faculty Development

CONTENTS

I. 平成26年度FD報告書作成にあたって

■ FD委員会委員長(教育担当理事)	2
--------------------	---

II. 鹿児島大学のFD活動	5
----------------	---

第1部 全学的取組

■ 鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針の作成	6
----------------------------------	---

■ 新任教員FD研修会報告	8
---------------	---

■ FD・SD合同フォーラム	11
----------------	----

■ 学生・教職員ワークショップ	14
-----------------	----

■ 鹿大版FDガイド第8号、第9号の発刊にあたって	27
---------------------------	----

■ 大学IRコンソーシアム・アンケートの実施	28
------------------------	----

■ 教育センター高等教育研究開発部(共通教育)のFD活動	32
------------------------------	----

第2部 各学部・研究科のFD活動報告	43
--------------------	----

■ 法文学部、人文社会科学研究科	
------------------	--

■ 教育学部、教育学研究科	
---------------	--

■ 理学部	
-------	--

■ 医学部	
-------	--

■ 歯学部	
-------	--

■ 工学部	
-------	--

■ 農学部、農学研究科	
-------------	--

■ 水産学部、水産学研究科	
---------------	--

■ 共同獣医学部	
----------	--

■ 理工学研究科	
----------	--

■ 医歯学総合研究科	
------------	--

■ 保健学研究科	
----------	--

■ 司法政策研究科	
-----------	--

■ 臨床心理学研究科	
------------	--

■ 連合農学研究科	
-----------	--



平成26年度FD(ファカルティ・ディベロップメント) 報告書作成にあたって

鹿児島大学FD委員会委員長(教育担当理事)

清原 貞夫

本報告書は「教育センター年報」から独立して5報目となり、この5年間でFD活動は各学部の教育研究職員・教育センターメンバー・事務系職員みなさんの努力の下、年間を通しての流れも定着しそれぞれのディベロップメントに向かって精進してきました。

FD委員会のミッションは、本学が掲げる教育理念・目標を達成すべく、教員個々の教授法の開発と授業力アップ、そして学習効果をあげるための学生支援です。昨今さらに、各学部のカリキュラム・プログラムの再構築も視野に入れた提言も求められ、更なる教育環境の充実も目指しています。平成22年度以降のFD委員会の活動の詳細は、(<https://www.kagoshima-u.ac.jp/education/fd.html#000825>)をご覧ください。

平成26年度は、3つのワーキンググループ「FD研修会」、「学生・教職員ワークショップ」、「FDガイド」による企画・運営とFD・SD合同フォーラム等は教育担当学長補佐が中心となり、企画・運営に携わる体制としました。

継続的な取組として、新任教員FD研修会、「アクティブ・ラーニングを大学教育に定着させるためには」のテーマで実施したFD・SD合同フォーラム及び学生・教職員ワークショップがありました。ワークショップのテーマは、「『英語を学ぶ』から『英語で学ぶ』へ」で、参加者が英語で学ぶ必要性、問題点を理解し、学生のグローバル化を促す教育について活発な議論がありました。FDガイド第8号、第9号も発刊されました。

また、平成26年度からの新たな業務として、平成24年度に入会した大学IRコンソーシアムの学生調査実施が加わりました。平成24年度及び平成25年度に試行的に実施した1年生調査に加え、FD委員会では上級生調査の実施方法を検討し、各学部で調査を実施しました。

FD活動は、教職員個々人の向上意識と自発的な取組が不可欠であり、このような教育を改善する活動には多大な時間と労力がかかります。授業力アップには各教員の最も大切にする価値や活動に根ざすことが肝要であり、その中心的「核」となるものは、その人の研究領域での活動であると思います。したがってFDでは、研究活動が教育に密接に関与することを自覚し、職務遂行力の向上とキャリア形成を念頭に、全教職員が一步一步粘り強く、研究・教育活動を推進していってほしいと念じています。

平成26年度 FD活動一覧

6月	共通教育前期授業公開・授業参観(6/30~7/11)
8月	鹿大FD報告書(平成25年度)の作成
9月	新任教員FD研修会(9/25) 鹿大版FDガイド第8号の作成
10月	FD・SD合同フォーラム(大学地域コンソーシアム鹿児島FD・SD活動事業部会と共催)(10/4) 共通教育後期授業公開・授業参観(10/27~11/7)
11月	大学IRコンソーシアム・アンケート実施
12月	学生・教職員ワークショップ(12/9)
2月	鹿大版FDガイド第9号の作成

平成26年度 FD委員会委員

所 属	氏 名	所属ワーキンググループ
理事(教育担当)	清原 貞夫	
学長補佐(教育担当)	有倉 巴幸	
教育センター長	飯干 明	
教育センター副センター長	富原 一哉	学生・教職員ワークショップ
教育センター高等教育研究開発部長	佐久間 美明	学生・教職員ワークショップ
教育センター高等教育研究開発部	洪井 進	学生・教職員ワークショップ
教育センター高等教育研究開発部	伊藤 奈賀子	FDガイド
法文学部	梁川 英俊	FDガイド
教育学部	中嶋 哲也	学生・教職員ワークショップ
理学部	青木 敏	学生・教職員ワークショップ
医学部	藤野 敏則	FDガイド
歯学部	田口 則宏	FD研修会
工学部・理工学研究科	本間 俊雄	FD研修会
農学部	坂巻 祥孝	FDガイド
水産学部	庄野 宏	FD研修会
共同獣医学部	大和 修	学生・教職員ワークショップ
医歯学総合研究科	田川 まさみ	FD研修会
司法政策研究科	采女 博文	FD研修会
臨床心理学研究科	安部 恒久	FD研修会
教育センター外国語教育推進部長	高橋 玄一郎	FDガイド

II
鹿児島大学
の
FD活動

第1部
全学的取組

鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針の作成

本学は、大学教育の改善を目指して、ファカルティ・ディベロップメント(以下、FD)を推進していくことを学内外に明らかにするために、「鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針」を作成し、平成26年7月17日の教育研究評議会にて決定した。

本指針では前文で、鹿児島大学が大学憲章の下に、自主自律と進取の精神を持った有為な人材育成を目的とし、その目的に根ざした人間を育成することができる教育を実施する責務を負っていることを明らかにした。その上で、FDを大学全体として推進していくための必要事項を定め、それぞれ大学の責務、部局等の責務、教員個人の責務を明確にした。

この大学教育を改善するアプローチとして、Diamond(2002)は、Faculty Development、Instructional Development、Organizational Developmentを挙げた。それぞれ順に、ファカルティメンバー個人に焦点を当てた個々の教授技術の改善(教員レベル)、教育活動に焦点を当てたコースやカリキュラムの改善(部局等レベル)、組織の構造や組織間の関係の改善(大学レベル)を意味する用語である。本指針では、この知見に基づいて、3つの階層に分け、FDの責務を明確にした。以下、条文に沿って概要を説明する。

大学の責務

まず、大学レベルのFDであるが、IR(institutional research)を通して、大学の理念や教育目標と、大学で行われている教育の整合性を精査する。評価の結果、改善・改革の必要性があれば、各部局の環境整備や各教員のFDへの取組に対して支援を行うことと考えた。このレベルのFDを実現していくためには、次の3つに着眼していくことが求められる。

大学の理念や教育目標にそった指針の設定

大学独自の教育理念や教育目標に沿って学生を教育するためには、教職員は何を身につけていく必要があるのかを、大学は明確に示さなければならない。そうした大学レベルのFDにおける指針があつてこそ、部局レベルおよび教職員レベルのFD活動が根柢を得て実施できる。

教学IRの必要性

大学でFDが推進されるためには、教育目標に加え、現在行われている教育がどのような状況なのかを的確に把握する必要がある。そのためには、大学情報と学生調査、大学ベンチマークをもとに、定期的に比較検討しなければならない。本学では現在、大学IRコンソーシアムに加盟し、学生調査を行うことで、成果と課題の把握に努めている。

組織開発(organizational development)

組織開発とは、組織が持つべき多様な強みや、組織が機能するために必要なプロセスや組織としての働きが、効果的に機能するように意図的につくりこんでいく作業のことを指す。大学の組織の骨組みをハード面とするならば、FDを進めていくためのソフト面が必要である。これは、人と人のコミュニケーションや協働、目標へのコミットメントの基礎となる組織への信頼感、組織としてのまとまりなどを指す。大学は、もともと様々な分野の専門家が集まっている組織であり、ある意味、現代の組織におけるキーワードでもある「ダイバーシティ(多様性)」が高い組織である。従って、大学は、こうした組織上の特性を踏まえ、まとまりや一体感、コミュニケーションなどのソフト面を積極的に構築する必要がある。大学レベルのFDでは、この組織開発に投資をしていくことが求められる。

部局等の責務

次に、部局レベルのFDであるが、これは、各研究科、各学部・学科のFDであり、教育目標とアドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー(以下、3ポリシー)と整合性のあるカリキュラムを提供できているかを精査し、必要に応じて、カリキュラムの開発や改善に努め、教育の質の向上を図ることと考えた。このレベルのFDを実現していくためには、次の3つに着眼していくことが求められる。

教育目標、3ポリシーの理解と普及

部局(研究科、学部・学科)レベルの教育目標および3ポリシーを、教職員に理解させるための取組を各部局で行う。これらは抽象的な用語で説明されているので、具体的な行動指針として周知させていく必要がある。

到達目標としての3ポリシー

教育目標および3ポリシーは、現時点での各研究科、各学部・学科の到達目標となっているはずである。整合性を高めるためには、現行のカリキュラムやシラバス、教育活動の現状について精査する必要がある。何がどの程度、3ポリシーと整合しているのか、場合によっては、教育目標や3ポリシーを見直すことや、教育活動改善のために学科やコースの再編(改組)も必要となる。

カリキュラムの一貫性と系統性

大学はこれまで、個々の教員の専門性に基づき授業が実施され、カリキュラムの一貫性と系統性は、資格や免許に必要な科目においてさえ、低いものであった。部局レベルのFDにおいては、教員の専門性に基づいた科目を提供するのではなく、3ポリシーと整合性のあるカリキュラムを構成し、そのカリキュラムに必要な専門科目を開講するよう、教員の意識改革を進め、教員相互のコミュニケーションを図り検討していく必要がある。

教員の責務

最後に、教員レベルのFDであるが、これは、狭義のFDであり、個々の教員の授業改善の取組を指す。各教員が担当している授業の目標やシラバスの検討を行い、学生理解・支援、授業内容、授業方法、教育評価、カリキュラム開発・改善に関する知識・技能を高めることを目指すと考えた。このレベルのFDを実現していくためには、次の4つに着眼していくことが求められよう。

「教える(teaching)」から「学ぶ(learning)」へ

教員が学生に知識や技術を一方的に教えるという関わりから脱却し、学生の学びを教員が支援するという関わりへと変わることが大切である。そうした関わりを通して、学生の主体的、能動的な学習(アクティブ・ラーニング)を保障できる。

学生の学びや実態を理解する視点

「大学教員は学生の学びを学ぶことによって教授法を改善できる(Ramsden, 2003)」の考えに立てば、学生がどのような学びや学び方をしているかを理解することが大切である。加えて、学び以外の学生の実態や心理を学ぶことで、適切な関わり方を知る上での手がかりとなる。

教授法を学ぶこと

大学教員は教授する専門的内容については、非常に豊かな知識や技術を有しているが、それをどのように学生に伝え、学びを促進させるかといった教授法を知らない。かなりの部分、教授法に対する教員個々の関心の程度に左右されているのが現状である。

多様な研究分野、多様な他者、多様な価値観への関心

ある分野の専門性を極め、アイデンティティをもつことは、一方で、多様性を認めず、類似した他者との関わりを志向し、特定の価値観に与する危険性を併せ持っている。開かれたコミュニケーションに対する関心や能力を高めることが、教員レベルのFDにおいて求められる。

以上、FDにおける3つの階層について、それぞれの内容と着眼点を整理した。今後、本指針が絵に描いた餅にならないように、各階層レベルで着実にFDを実現していくことが求められよう。

(文責:教育担当学長補佐 有倉 巳幸)

新任教員FD研修会報告

1. 概要

- テーマ▶ アクティブ・ラーニングを活用した授業の立案
- 日時▶ 平成26年9月25日(木) 13:15～16:15
- 場所▶ 郡元キャンパス 共通教育棟2号館1階 212号・213号教室
- 対象▶ 平成25年7月2日～平成26年7月1日採用の新任教員
- 参加者▶ 37名



2. 研修会の趣旨

本研修会は、主にこの1年間に鹿児島大学に教員として採用された教員が、本学が目指す教育を理解し、それぞれの教育活動として推進することを目的としている。

今回の研修は、前回のアクティブ・ラーニングを促す「シラバス設計」を発展させ、「授業の立案」を取り上げた。具体的な教育計画（授業「失敗事例から学ぶ」）を立案するグループ討議を通して、アクティブ・ラーニングにおける教員の役割について理解を深める機会とする。

3. 当日のプログラム

13:15	開会挨拶(清原貞夫教育担当理事)
13:20	アクティブ・ラーニングとは(田川まさみFD委員)
13:35	グループ討議 課題説明(田口則宏FD委員)
13:45	グループ討議①テーマの選択、参加者の経験、必要な能力、効果的な学び方
14:05	休憩
14:20	グループ討議②授業概要作成、目標、学習方法、学生支援
15:25	発表、質疑
16:05	全体のまとめ、アンケート(本間俊雄FD委員)
16:15	解散 (司会・議事進行:庄野宏FD委員、安倍恒久FD委員)



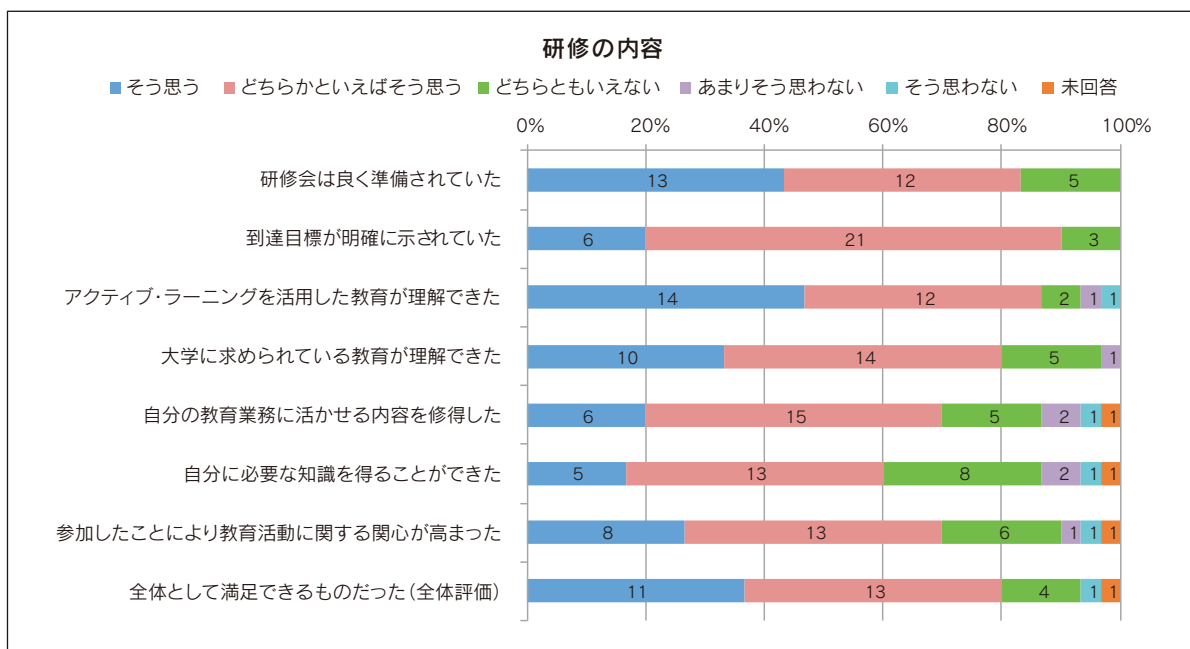
4. 研修会のまとめ

研修会自体がアクティブ・ラーニングの手法で企画された。まず基調報告で、鹿児島大学の目指す教育の実践、望ましい学習像(学生が能動的に学習する過程が必須であり、教員の役割は学生の学習支援である)を参加者に伝えた。

次に、グループ討議(ワークショップ形式)においては、アクティブ・ラーニングを活用した新しい科目の提案として、授業「失敗事例から学ぶ」を取り上げた。討議の課題では、建築耐震偽装、医療事故、食品偽装、水俣病などの失敗を起こさないために必要な知識、技能、態度、倫理観等は社会人、専門家に必須であり、大学生が習得すべき学習内容となっていることを説明し、グループ討議に移った。グループ分けは、専門分野横断的に行った。

グループ討議では、失敗事例に学ぶ授業をアクティブ・ラーニングの手法によって組み立てることが期待された。5グループごとに特色ある議論がなされ、「現代社会と職業倫理」、「ネット時代の情報発信を考える—SNS炎上から身を守る—」などをテーマとして学生の主体性・能動性を引き出す授業計画案の報告がなされた。

今回の研修を通して、問題解決力と自主的な学習習慣を習得するためのアクティブ・ラーニングの重要性を理解し、授業計画の立案と学生の支援を行うことができる、という目標を参加者に自覚してもらうことができた。



- 事後アンケート(回収、30人)でも、「アクティブ・ラーニングを活用した教育が理解できた」、「大学に求められている教育が理解できた」、「参加したことにより教育活動に関する関心が高まった」などという全項目で、非常に高い満足度が示された。

【自由記載欄意見例】

- アクティブ・ラーニングとは何かについてだけでなく、授業計画の立案について考えること、学ぶことができてよかった。
- これまでの教育ではなかった手法(ロールプレイなど)について、他部局の先生方からの意見があり、示唆的で良かった。
- アクティブ・ラーニングの方法について、実際体験しながらでしたのでとても楽しかった。
- アクティブ・ラーニングという定義が少しあいまいな気がする。もっと具体的な事例を教員に体験させた方がよい。
- アクティブ・ラーニングの事例についての解説をもう少し時間をとって詳しくいただければさらに理解が深まったと思います。
- 他学部の先生方とディスカッションするのは大変有益であった。「アクティブ・ラーニング」の具体的な手法、種類等について学びたい。



(文責:司法政策研究科 采女 博文)

FD・SD合同フォーラム

1. 概要

- テーマ ▶ アクティブ・ラーニングを大学教育に定着させるためには
- 日時 ▶ 平成26年10月4日(土) 13:00~16:30
- 場所 ▶ 郡元キャンパス 共通教育棟1号館111号教室、2号館212・213号教室
- 参加者 ▶ 80名(参加校:志學館大学、鹿児島国際大学、鹿児島純心女子大学、鹿屋体育大学、第一工業大学、鹿児島高等工業専門学校、鹿児島県立短期大学、鹿児島純心女子短期大学、第一幼児教育短期大学、北海道大学)
- 主催 ▶ 大学地域コンソーシアム鹿児島、鹿児島大学FD委員会

2. 基調講演

学生の「能動的な学び」に基づく授業の展開
—PBL(Problem/Project-based Learning)による実践の紹介

講師:中西 良文氏(三重大学教育学部/高等教育創造開発センター)

①アクティブ・ラーニングおよびPBLをめぐる状況

現代の大学教育には、大別して2つのことが求められている。1つは、自ら学ぶ力の育成である。このことは高等教育のみでできることではなく、初等教育から高等教育に至るまで一貫して取り組むことが求められている。もう1つは、社会人として求められる力の育成である。高等教育進学率が50%を超える現代においては、知識内容の修得だけでなく、汎用的能力や働くための基礎力の育成が強く期待されている。そうした能力育成に効果を発揮するものとして関心を集めているのがアクティブ・ラーニングである。

アクティブ・ラーニングは2012年に示された中央教育審議会答申において、「学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」とされている。ただし、総称という表現からも明らかなように、具体的な手法については、体験学習や調査学習の他、教室内でのグループ・ディスカッション等も含まれており、非常に幅広く解釈されている。例えば、「一生懸命授業を聴く」という行為にも能動的な側面はあるということも可能であり、「能動的」であることの質の違いにも目を向ける必要がある。

こうしたアクティブ・ラーニングの一形態がPBLである。PBLとは、「特定の領域における理論的説明や専門的な実践にかかわる現実的な問題が小グループに与えられ、その解決法の検討を通して学習を進めるものである」(当日配布資料より抜粋)。PBLには、知識を結びつけて組み立てることや日常生活を関連付けた学びなどが可能であり、その有効性は学習科学の知見からも明らかにされている。



②PBLの実践事例

今回は、PBLについて4つの科目での実践が紹介された。共通教育科目である「4つのカスタートアップセミナー」「PBLセミナー」と、専門教育科目である「教育心理学」「教育実地研究」である。以下では特に、「4つのカスタートアップセミナー」「PBLセミナー」の要旨について述べる。

(1)4つのカスタートアップセミナー

三重大学では、2005年の法人化を受けた第1期中期計画・中期目標においてPBLを通して「4つの力」を育成する方針が定められた。4つの力とは「生きる力」「考える力」「感じる力」「コミュニケーション力」である。

これを受けて2008年度より初年次教育科目「4つのカスタートアップセミナー」が開講された。この科目は、4つの力がどう役立つかを理解しつつ修得することを目指すと同時に、PBLを通して学ぶことによってPBLそのものについても学ぶことを意図している。授業を担当している特任教員は毎回授業案を作成・共有しているほか、各クラスの情報共有や改善方針の検討のために毎週ミーティングを実施している。また、共通テキストやルーブリックの使用などにより、全体の統一を図っている。

(2)PBLセミナー

この科目は、ガイドラインに沿って各教員が授業をデザインし、予備審査を通過した場合のみ開講できるものである。ガイドラインでは、自主的・能動的・自己決定的学習を受講生に求めること、グループワークを取り入れること、学期末に公開発表会を行うことなどが定められている。「PBLタイム」「自習時間」のセットで1つの授業であり、学生には教師に教えてもらうだけでなく、自ら学ぶことが期待されている。

中西氏の授業では、「学ぶところの法則発見」というテーマのもと、グループごとに決めた課題について授業時間内に練習し、その過程を通じて学びの法則を発見・検討するという実践が行われている。実践後の調査結果からは、文献講読や数学的な問題解決についてPBLではより積極的に学習行動が行われていること、特に、複数の文献・資料の内容をまとめる活動が積極的に行われていることが明らかにされた。

③まとめ

アクティブ・ラーニングというとグループ・ディスカッションやプレゼンテーション等の活動がイメージされやすいが、講義中心型授業でもアクティブな学びは可能である。それでも、PBLでしか見られない学びの姿も確実にあるものと思われる。大学教育の中にはいくらかそうした活動が含まれていることが望ましいのではないか。

今後は、異なる学習者の特性・能力にどのように対応するかを考えつつ、その一方で、全ての学習者により良い学びを実現できる場の提供が求められる。授業者は、場の準備はできても、最終的に学ぶかどうかを決めるのは学生自身である。学生が自ら学ぼうとするような場の構築や課題の提供をどのように行っていくかが大きな課題である。

3. 事例報告およびグループ・ディスカッション



フォーラム後半は会場を変え、事例報告とグループ・ディスカッションが行われた。

事例報告は、鹿児島大学理工学研究科の岡村浩昭氏から理系科目での実践について、同大教育学部の廣瀬真琴氏から文系科目での実践について報告が行われた。岡村氏からは、高校から大学への導入的な位置付けの理系科目においては学習内容が多いため質疑応答等の活動を行う余裕がないこと、学習者の知識のレベル差が大きい場合には学生からの積極的な発言や質問を引き出すのが難しいことなどが指摘された。そうした中でも、小テストの採点を学生同士で行わせる、予習・復習課題を明示してレポートを作成させるなどの工夫をしているとの報告があった。

廣瀬氏からは、協同学習の理論に基づく実践例が報告された。学生の主体性を高めるために、正解がなく、協同が必要な難易度の課題を設定することや課題探究の過程では役割分担によって責任をもたせること、思考・判断を伴う表現活動を組み入れることなどが要点として挙げられた。また、教員側の注意点としては、教え過ぎないこと、活動の内容や過程を記録できるようにして省察や修正を行う機会を提供することなどが挙げられた。

その後のグループ・ディスカッションは、鹿児島大学教育学部の有倉巳幸氏の司会進行に基づき、フォースフィールド分析という手法を用いて行われた。フォーラムのテーマである「アクティブ・ラーニングを大学教育に定着させるためには」に関してその推進力と抵抗力を可視化し、それぞれの具体的な対応策を見出してグループ内で共有し、今後の教育改善につなげることを意図した活動である。

グループ活動においては様々な推進力と抵抗力の例が挙げられ、どのグループでも活発な意見が交わされた。抵抗力の中には、授業以外の業務の多さなども見られ、より良い教育の実現のためには教職員の業務全体を見直す必要性もあることが示唆された。また、授業内容や方法の変更に対する抵抗感や新たな教授法に関する情報不足などの問題も指摘され、アクティブ・ラーニングの実現に向けた教員の支援体制整備の必要性も指摘された。

(文責:教育センター高等教育研究開発部 伊藤 奈賀子)

学生・教職員ワークショップ

1. 概要

テーマ 「英語を学ぶ」から「英語で学ぶ」へ

日時 平成26年12月9日(火) 16:10～19:10

場所 郡元キャンパス 学習交流プラザ2階 学習交流ホール

参加者 63人(学生31人、教員24人、職員8人)

対象者 教育に関心のある本学の学生、教職員

学生…各学部より推薦を受けた学生、自主参加希望者

教員…各学部、学共施設等の学生教育に関わっている教員、教務委員、FD委員

職員…各学部学生系職員、学生部職員

目標 参加者は、「英語で学ぶ」授業の必要性、問題点を理解し、学生のグローバル化を促す教育を計画できるようになることを目指す。

社会のグローバル化に伴って、大学においても教育内容と教育環境の国際化を進め、世界で活躍できるグローバルリーダーやグローバルな視点をもって地域社会の活性化を担う人材を育成することが求められている。具体的には「教育再生実行会議」の第3次提言において「日本人教員の語学力、特に英語による教育力を向上させ、英語による授業比率を上げる」ことや外国人留学生を対象に「英語による授業のみで卒業可能な学位課程の拡充」などが課題として挙げられている。この動きに対応して、鹿児島大学でも、専門や共通教育の授業を「英語」で行う試みがなされはじめているが、先行する大学では母語を使用しない教育のデメリットも多く指摘されている。

そこで、このワークショップでは、「英語で学ぶ」授業の本格的導入に先立って、愛媛大学の事例紹介と改善に向けたグループ討議を行い、その利点と問題点を洗い出すことにより、その効果を最大限に生かすための授業のあり方を検討することを目的とした。



2. プログラム

司会進行：渋井FD委員

時間	内容		担当
16:10	開会		清原貞夫FD委員会委員長(教育担当理事)
16:15	今なぜ「英語で学ぶ」なのか		富原一哉(FD委員)
16:20	事例紹介 「ネイティブ教員と日本人教員が 共同で運営する英語授業について」		講師：田中寿郎氏 (愛媛大学共通教育センター長)
17:10	グループ討議	説明	青木 敏(FD委員)
17:15		グループ討議	FD委員
18:30		発表	大和 修(FD委員)
19:00	アンケート記入		
19:05	まとめ		佐久間美明(FD委員)
19:10	閉会		

グループ討議：「英語で学ぶ」授業を通して学生がグローバル化に対応した知識・技能と学習習慣を習得する教育を行うために、以下のテーマについて討議する。

①どのような内容を「英語で学ぶ」べきか？

- 共通教育で行うことが望まれる「英語で学ぶ」授業
- 専門教育で行うことが望まれる「英語で学ぶ」授業
- 日本人学生と留学生のニーズ

②「英語で学ぶ」授業を実施する際の問題点とその解決方法は何か？

- 学生の理解を促進するための工夫
- 教員の英語教授スキル向上の方策
- カリキュラム編成や教育補助機器の利用
- 実践的な外国語コミュニケーション能力(国際学会での発表、国際的ビジネス、国際交流等に必要とされる能力)をいかに実現するか？
- 自習での外国語修得を支援する教員、専門職、制度等、必要な資源の提供
- 学生の意識改革の方策

3. 結果概要

(1)事例紹介の内容

講師に愛媛大学共通教育センター長の田中寿郎先生を招き、「ネイティブ教員と日本人教員が共同で運営する英語授業について」というテーマで事例紹介していただいた。本事例紹介では、愛媛大学で実施された英語で行う講義の実態について報告された。特に英語で講義を成就させるには、次の6つのポイントが重要であると報告された。

- ①先生方の専門のトピックスを高校生にもわかるように噛み砕くこと
- ②講師の話す時間は最長でも40分以内とすること
- ③40分の講義内容について、学生にはディスカッションや共同作業を行ってもらい、分からない部分があれば、理解を助けること
- ④クラスは日本人と留学生の混合で20名程度にすること
- ⑤英語の文法や語法などの正確性について不問とすること
- ⑥教員が望む場合は事前にネイティブの指導を請うこと

(2) グループ討議の主な内容

参加者は8グループに分かれ、2つのテーマの中から、事前に割り当てられた1つのテーマについて討議を行った。

①どのような内容を「英語で学ぶ」べきか？

【①-1班】

◎現状の問題点、改善項目

- 対応教員の数の問題
- 教員の学生対応の問題
- 必修の選択
- 演習形式だと参加しやすい
- 学生のレベルに合わせて授業・評価
- 学生の意識づけができていない
- クラスの規模・教員数・教室
- 全学生対象にできるか？

◎提案

- 外国人講師による職業にからめた授業がよい。
- 留学生の参加が好ましい(TAもあり)。
- 留学生の必要単位として授業を設けてはどうか。
- Skype等を利用して、第二外国語圏の言語・文化を英語で理解する試みはどうか。
- 留学生と日本人学生の双方のニーズが合う授業とは？(グローバルな話題、世界の文化、テレビ・アニメ等を教材とした文化の理解、日常的なテーマ、学部特有の専門分野を持つグローバルな問題、学生のモチベーション別・目的別に選択できる授業の準備など)

【①-2班】

◎現状の問題点、改善項目

- (1) 英語で学ぶ目的とは？
- (2) 英語で学ぶ授業とは？

◎提案

- (1) について
 - 最も大切なもの：専門領域の学力→日本語で教えるべき
 - 発信力、コミュニケーション能力→英語力が必要
 - 目的によって英語の必要性が異なってくる

(2)について

英語で学ぶ授業の実現のためには？

→学生からのニーズ

→仕組みの変更

①1～2年生の専門的な授業内容になる前に導入

②学生のニーズ対応(英語or日本語)

→教員の英語力向上

その他

TOEFLを受ける機会を鹿児島でも増やす

英語で学べる科目を増やす

【①-3班】

◎現状の問題点、改善項目

- (1)英語を学ぶ目的がはっきりしていない
- (2)英語をどうやって学ぶか
- (3)Moodle上の言語は？
- (4)上級外部試験(TOEICなど)≠英語で会話する

◎提案

- (1)論文で英語が必要。研究者になるのであれば会話的な英語を学ぶよりは専門単語を学ぶ必要がある。
- (2)パターンプラクティス。自ら積極的に学ぶ姿勢を持つ(先生に聞きに行くなど)。
- (3)制約がない方が良い(最初から英語から入りたい人もいれば、日本語から少しずつ英語に入りたり人もいるため)
- (4)英語での会話は解釈の違いや比喩も含んでいる。留学すれば、生の英語を感じることができる。

英語で話ができる(その人の目的によって、あいさつ程度の会話や日常生活での会話のレベルなどがある)

【①-4班】

◎現状の問題点、改善項目

- 学生の予習が足りない
- 教員の英語能力の不足
- 授業外学習の設備の不足
- 英語と日本語の両方で授業をすると教授内容が減る

◎提案

- 学生が既に知っている内容は英語でも良いのではないか。
- 講義を英語にすることで授業外学習の定着にもつながるのではないか。
→学習スペースがないので、『英語で講義する』という内容を国際標準に合わせても、他の設備も充実すべき。
- まずは、共通教育の英語教育を英語で行うことから始める。その中で、英語でのプレゼンテーションを練習することが大切。
→英語で話した方が論理的であることから、論理的なプレゼンテーションを作ることが大切。その後、ディスカッションで(英語による)改善を図るという内容。
- まずは、配布資料、テキストから英語にすることも良い。
- 学生にとって価値ある内容ならば、英語で授業しても良いのではないか。
- 教員の話す英語が流暢であれば、学生も楽しめるのではないか。

②「英語で学ぶ」授業を実施する際の問題点とその解決方法は何か？

【②-1班】

◎現状の問題点、改善項目

- 教員と学生との間で英語力の差が大きい。
- 多くの教員が英語で専門分野の授業をしなければならない(例:水産学部H27年度から)
- 受講学生のバックグラウンドの違い
 - 留学生：英語は理解できるが専門内容を理解できていない。
 - 日本人：専門内容は理解できるが、英語が理解できない。

◎提案

- 教員のスキルアップ(教授能力向上)に向けた努力が必要(資格取得など)。大学のバックアップも有効。
- 英語で授業を行う目的を理解して、目的に合わせた授業内容や教授法を考える(全講義終了時に何を身につけさせたいか、という目的を明確にすべき)。
- 英語で学ぶ授業を必修にするという方法もある。
- 英語で学ぶ「動機づけ」となる授業を行う。英語の重要性を学生に理解してもらうことが必要。
 - 低学年のうちから国際学会などに行きさせ、刺激を与えるetc.
- 英語を学ぶ環境を整える(ハード/ソフト両面で)
- ディスカッションを活発にするために少人数制を取り入れる。

【②-2班】

◎現状の問題点、改善項目

- 学生の英語学習のモチベーションをどうあげるか？
- 学部による違い。
- 英語で何を伝えるか、中身の問題。
- 教授法

◎提案

- 専門英語に特化する
- 英語テキストを利用
- 英語に関心をもつ学生を集める。全体のレベルUPは難しい。
- 英語のプレゼンは比較的上手。いかに英語でのディスカッションをさせるか？
 - 質疑応答の仕方を教えるのが大事。質問のフォーマットを覚えさせる。
- 専門教育との連携が必要。英語で相手に伝える中身がないので、そこを強化する。専門教育のなかで英語の重要性を伝えないとけない。
- 下からお尻をたたく(TOEICなどの義務化)と上からひっぱりあげる(海外研修や海外の人の体験談を聞く)の両方をやるしかない。
- 反転授業(英語で教材を与え、予習してもらい、授業中には質問やディスカッションをする)

結論として、学部レベルでは「英語で学ぶ」よりは「英語を使う」と考えたら良い。

【②-3班】

◎現状の問題点、改善項目

- 学生が「英語で学ぶべき理由」を理解していない。
- 教員が英語「で」教えられる力があるのかが明確ではない。
- 学生が英語で学ぶことができる英語力があるのかが明確ではない。

◎提案

- 英語を学ぶ必要性を学生が理解できるような機会を設け、動機付けする。
- TOEIC、TOEFLなどを実施して教員・学生が「英語で教える」、「英語で学ぶ」ための英語力があるのかを、客観的に分析することから始める。
- 学生が「英語で学ぶ」力をつけるための案として、1～5分間のプレゼンを重ね、慣れていく。
- 教員のためのサポートシステムとして、英語で教えるためのスキルを身につけられるような研修(2～3か月)を行う。

【②-4班】

◎現状の問題点、改善項目

- 英語が出来なくとも仕事に支障がない(最新の知識も邦訳されている)
- 国際的に日本の知を発信する際は必要。
- 学生の受験英語の弊害。
- 日本語でもディベートに消極的。

◎提案

- どのような授業に出会えばよいのか(きっかけ)。
- 授業以外の時間にも英語を使う。
- 英語が使えると楽しい、英語への抵抗が下がる、程度の目標を掲げる。
- 教室の机をディスカッションしやすい配置にする。
- 学生にディスカッションできる話題を提供。
- i-padを各グループに配布して投影。
- 教室の壁も投影できる白色にするなどの工夫。
- 興味を持ちやすい話題の提供。
- グループとして評価すると、お互いに高めあえる
- TAが効果的に参入する。(学部生同士でもリーダー的な学生が入る)
- 日本語の授業の中で英語を使い、必要性に気付くようにする。
- 夢ややりたいことのため、プラスの危機感をもつ。

〈資料〉

学生・教職員ワークショップ「英語で学ぶ」から「英語で学ぶ」へ 事後アンケート

事後アンケート

2014.12.9

本日は、ワークショップへのご参加ありがとうございました。FD委員会では皆様のご意見を参考に活動を改善し、新たな企画を計画いたします。皆様の率直なご意見をお聞かせください。
(選択の部分は、番号を○で囲んでください。)

1. ① 学生 ② 教員 ③ 職員

2. 本日のワークショップは有意義でしたか。

① 全くそう思わない ② あまり思わない ③ どちらでもない ④ 少しそう思う ⑤ 非常にそう思う

3. あなたは、積極的に参加しましたか。

① 全くそう思わない ② あまり思わない ③ どちらでもない ④ 少しそう思う ⑤ 非常にそう思う

4. このワークショップに参加して、何が得られましたか。

[]

5. ワークショップに対するご意見等を自由にお書きください。

[]

※今後、FD委員会で取り上げてほしいテーマがありましたら、お書き下さい。

[]

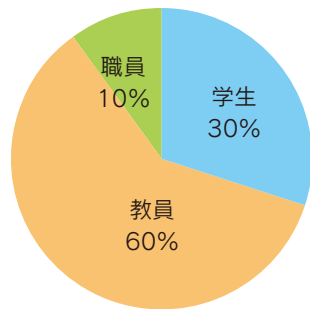
ご協力ありがとうございました。

事後アンケート(まとめ)

①ワークショップ参加者

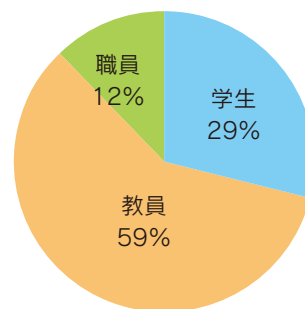
(グループ討議)

学 生	20人
教 員	40人
職 員	9人
	69人



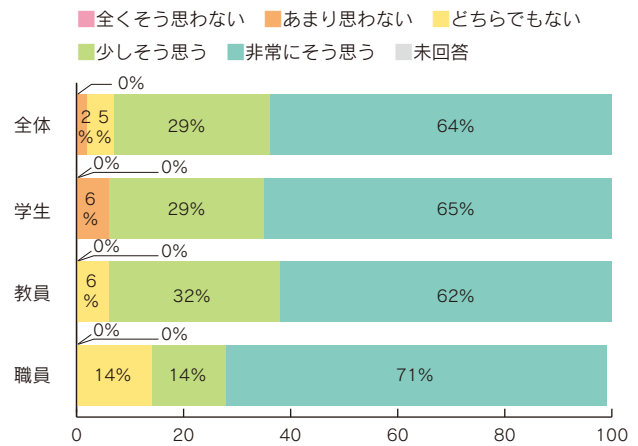
(アンケート回答者)

学 生	17人
教 員	34人
職 員	7人
	58人



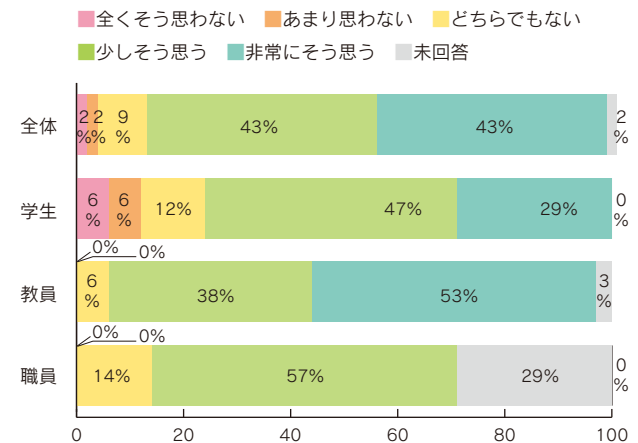
②本日のワークショップは有意義でしたか。

	全体	学生	教員	職員
全くそう思わない	0	0	0	0
あまり思わない	1	1	0	0
どちらでもない	3	0	2	1
少しそう思う	17	5	11	1
非常にそう思う	37	11	21	5
未回答	0	0	0	0
計	58	17	34	7



③あなたは、積極的に参加しましたか。

	全体	学生	教員	職員
全くそう思わない	1	1	0	0
あまり思わない	1	1	0	0
どちらでもない	5	2	2	1
少しそう思う	25	8	13	4
非常にそう思う	25	5	18	2
未回答	1	0	1	0
計	58	17	34	7



④このワークショップに参加して、何が得られましたか。

学生

- 自分は留学して、将来的に小学校教員になることを考えているため、留学先でどんなことを学び、小学校の現場でどのような教育をすると良いかという考えを深められる良い機会となりました。
- 英語で学ぶ意義について改めて考えることができました。私自身教員を目指しているの、これからどのようなことを学ぶべきか、力を身につける必要があるか明確にすることができました。
- 得られたもの・教員による視点
得られなかったもの・英語で学ぶ意義が結局分からない
- 英語で学ぶという意義について、色々な意見を聞き、さらにまとめるのがいかに難しいか。やはり動機付けが肝心。
- 大学教員や職員の方々と話す機会があり、様々な意見や考え方に触れることができた。『英語で授業を行うこと』について深く考えることができた。
- 教員の立場から見た「英語で学ぶ」ということに関する考えを知ることができた。他大学の取り組みについて知ることができた。
- 教員がどのように考えているのかということが分かり良かった。
- 来春には卒業するので特に無い。
- 様々な学部での取り組み。これからの英語をつかった授業での問題点・課題。
- 自身の意見を理解してもらえるように伝えること。様々なアイデア・考え方。
- 普段講義を受けているだけでは、なかなか分からなかった大学が行う「英語教育」の取り組み方について知ることができました。また、学生だけでなく、色々な学部の先生方、職員の方の意見が聞いて有意義でした。
- 現在の日本の学生が持つ英語に対する思い、または教員が持つ思いというのを確認できた。教員も英語を教えるのに苦労しているのだと初めて知った。(自分の学部(学科/コース)の教員は苦手意識を持っている方はいない感じがしたので)学生-教員相互の気持ちが知れてよかった。
- 「英語」はあまり将来的に必要なと感じていましたが、今回のワークショップを通して、「英語」のこれからの必要性などを知ることができ、英語について考える良い機会になりました。
- 先生方の考え方が聞いてよかった。どのように考えているのか知りたかったから。
- 英語で学ぶという考えをもっていなかったが、ワークショップに参加して英語を学ぶのではなく英語で学ぶという重要性に気づけた。
- 教員や違う学部生の意見が聞いて、新鮮だった。講演もMoodleの利用など、参考にしてみてもいいのではと思えるものもあり、有意義だった。
- 教員達も英語で授業をすることにに対して不安に思っていることが知れて、今後先生とともに英語を学んでいこうと思えた。

教員

- みな苦労していることが分かった
- This workshop is very useful for the improvement of both the faculty staff and students.
- 講演会を聞いた愛媛大の例はすぐに使えそうで参考になりました。その他、留学生とかが考えている日本人観から日本人の英語習得の困難さを感じた。英語で授業外学習が増えるかもしれない可能性を知った。
- 英語で授業を行うことについては、やはり検討すべき点が多く、「何のために」という目的意識を教員側もはっきり持たなければならぬと思いました。ありがとうございました。
- 他学部の実状や学生さんの幅広い意見がワークショップで得られて刺激になった。
- 「英語で学ぶ」こと以前に、「なぜ英語で学ぶ必要があるのか？」を考えるきっかけを得られた。教員も英語スキルを早急に高めないと、今後の大学改革についていけなくなりそうな危機感を感じた。
- 悩みどころを突き詰めていくと学修意欲に至るのは、日本語でも英語でも同じだという実感。
- 学部で同様のFDワークショップを行うに当たって、有益な情報が得られた。

●英語の授業の組み立て方

K大で行われている英語による授業

学生の学習への姿勢(消極的なのは全体にいと分かった)

- 問題点はどのグループでも同じで、共通していることがわかりました。
- 他の学生、職員、教員の考え方が分かった。同じような考えが多いという印象です。
- 今後英語による授業を実施する上で、問題点と対策を明確に意識することが出来た。解決はまだ遠いと思うが、とりあえず、何にとり組むべきかを考えることができたのは有益だった。
- 他の部局の状況がよく分かり、学部でのヒントが得られた。
- 参加しただけでは何も解決しないことが分かった。ただ、英語授業に対する抵抗感はやや減少した。
- 参加者の共通意識、考え方の違いの範囲、カリキュラム検討上のヒント
- 立場の違う意見が聞けた。議論は楽しく有意義であった。
- 今回のテーマに対して、だれしも同じような発想となること。大学組織としての対応の準備と個々の教員の努力が必要と実感できたこと。
- 英語による授業を廻る、学生・教員双方の抱える問題点について、知恵が得られた。特に理系と文系での違いなども明確に認識でき、有意義であった。
- 全国の流れ、鹿大での問題点などを考える良い機会でした。
- 英語「で」学ぶことのむずかしさが良くわかった。
- グループ討議はいろいろな考え方を聞いてよかった。
- 英語を授業に積極的に取り入れる必要性や、問題点について様々な意見を知ることができた。
- 鹿大の教員の現状、認識をある程度知ることができた。
- 英語で教育をする課題について他教員と共有できました。
- 各人の問題が明らかになった。一方で鹿大の国際化については教員・学生のレベルから簡単なことではないことが理解できた。
- 事例紹介がとても有意義でした。
グループの学生が英語教育に対して意欲的な方ばかりで刺激を受けました。
- 学部ごとの取り組みの違いを知ることができた
- 各テーマについて多様な意見を聴くことが出来ました。多くの準備を有り難うございました。
- 鹿児島大学が全体的に英語を用いた教育にとり組もうとしていることが理解できた。
- 他学部の英語教育の取り組みを知ることが出来た。一般学生の意見を聞けた。
- 具体的提案は今後に生かせる。
- 学生の英語教育に対する関心が高いことが分かった。
- 色々な意見がある事がわかった
- Prep-sheetの有効性を再確認できた。グループワークの進め方についてヒントが得られた。

職員

- 同じグループの学生さんが意欲を持って大学で学んでいることが分かり、いい刺激になった。先生方の意見も聞くことができ、有意義な時間であった。
- 愛媛大学での教員に対する取り組みはとても興味深かったです。本学でも「英語で学ぶ」授業を行う場合、同様の取り組みが必要ではないかと思いました。
- 学生と教員の考え方の違いが分かった。
- 皆の意見を聞けた。英語での授業の必要性やグローバル化が叫ばれているが、その流れに対する教員や学生の率直な意見を聞くことができたのは大変有意義だった。
- 学生の中で英語が重要視されていない事実。英語を学ぶ楽しさや将来性を見つけられるような場があれば良いと思いました。
- 共通教育と専門教育で取り組むべき課題や大学として取り組むべき環境整備が分かりました。

⑤ワークショップに対するご意見等を自由にお書きください。

学生

- 普段お話ができない教員の方々と近くで話せて良かったです。テーマをもっと簡潔にした方が、話がまとまったのではないかと思います。
- 実際に先生方とお話をする機会はあまり無いので、とても貴重な体験となりました。ありがとうございました。
- とても有意義な時間であった。やはり、英語で講義をするというのを実現するのは難しい、、、のかなと感じた。
- 様々な立場の参加者が集まることで、新しい考えをシェアすることができたと思う。話し足りないこと、聞き足りないこともあったが、また機会があれば参加してみたいと思った。今日のテーマの中では、学生や教員のアンケート結果があると良いと思った。
- このような学生が教員と話せる機会があるのは良かった。
- 教職員と議論をする機会は少ないので良かった。今回のワークショップでなされた議論が今後の授業運営に活かされることを期待したい。
- グローバルな人材を育てることが大学で行われる英語教育の目的、目標であるとする前提をよりはっきりして頂きたかった。TOEICやTOEFLは、はたしてグローバルな人材の育成につながるのか疑問である。
- 参加したことで、改めて英語力の必要性を感じることができました。さらに、考えをまとめたり、人に伝えるための練習も行いたいと感じました。有意義な時間をすごせてよかったです。
- この様な機会を初めて知りました。今、4回生ですが、もっと早くこの様な取り組みに参加し、どのような取り組みがあるのか、等を知ることができればよかったと思いました。この様なワークショップがあることをもっと他の学生の皆さんが知り、多くの方の意見が反映されればよりよい案がでるのではと思いました。
- 有意義な時間だった。まず学生は英語よりも日本語でdiscussできないといけないと思う。このようなworkshopに初めて参加したが、ぜひ次回も参加してみたいと思った。
- 意見が出され、実行されれば、有意義なものである会。
- 学生同士、教員同士で話し合っ、両方でどのような意見の違いがみられるのかを調べることもおもしろいと思った。
- こういう形式の話し合いは初めてだったが、思ったよりも面白かった。
- このようなことをやっていること自体知らなかった。もっと学生に通達すべきだと思う。

教員

- 考えを話しながら意見をまとめていくワークショップ形式はとても好きです。ただ、学生に行くと話す学生と話さない学生の差がでます。
- ディスカッションを通して、英語学習の問題点や意義、課題を考えることができてよかった。もっとふみこんだ具体的なとりくみの事例や、それに対する教員と学生の評価の事例もきけるとよかった。
- 来年も続けてもらいたい。有意義な企画であった。
- グループ別ディスカッションを設定するならば必ずファシリテーターを用意すべきだと思う。ただメンバーだけ決めてほたらかだったので驚いた。せつかくの機会なのにもったいないと思った。
- Since the workshop about English teaching, if possible next time, materials in English can be useful.
- いくつかの班の発表にコメントや講評を与えてくださると良かったのではないかと「ツール」としての英語を押し出した発表もあったが、「異文化」理解なしには喰うための英語にならんという意識を持つことが出来た。
- 教員がしゃべり倒すのを止めるのは本当に難しい。
- 講演は大変興味深かった。グループ討論はもう少しテーマを絞った方がよかったのではないかと。
- 自己紹介くらいは英語ですればよかった
- 英語の授業のスキルを高める方策がきけるのかと思い参加しましたが、残念ながら具体策を教えてもらえるような内容はありませんでした。

- 教員の英語スキルを上げる支援を考えてください。
- 英語による講義のデモがあればおもしろいのでは。
- できれば実施時刻を少しは早くしていただければと思います。
- グループ討議の際は少数グループに分けて別室で行いたかった。やかましすぎて発言を聞き取れないこともあった。
- しばしばやった方がよいと思います。
- 文科省から「英語による授業」の設置を強制されている以上、これはやらざるを得ない。大学の教員全体の理解を得る為にも複数回開催していただければ有難い。
- ワークショップの結果をあとで配付していただけると助かります。
- 良い企画でした
- 時期が厳しいので検討をお願いしたい。
- 学生がワークショップに参加するから、学生の意見や他部局の事情が少し分かって良かった。
- 「中国語を学ぶ」をテーマにとりあげては？
- 一つのテーマについて継続して行ってはいかがでしょうか。
- 大変勉強になりました。
- 何回か参加していますが、その都度発見があります。現状のような比較的意欲のある方を中心のワークショップを続けていくことで取り組みが全体に広がっていくとよいですね。
- 英語「で」学ぶのは難しい。大学入学以前に英語「で」学ぶことをしてこなかった学生は、まずは英語「を」学ぶことから始める必要があるのではないか。その延長として英語「で」学ぶことにつながるシステムが必要なのではないか。
- 学生・教職員ワークショップに参加するのは3回目でしたが、今日も楽しく参加させて頂き、かつ内容も有意義なものでした。ありがとうございました。

職員

- グループ討論では教員の意見・学生の意見も聴くことができてためになりました。
- 普段機会のない三者(学生・教員・職員)で意見を交わす良い機会であった。
- 英語「で」学ぶ必要性がまだ学生・教職員の間で理解が共有されていない状況なのではないかと思うので、今後も理解・周知を図っていく必要があるのではないのでしょうか。

※今後、FD委員会で取り上げてほしいテーマがありましたら、お書き下さい。

学生

- ワークショップを増やして欲しい。学生と教員が近くで話ができる機会がもっと欲しい。内容は、職業についての話などができたら良いと思います。留学などに挑戦したいと思う気持ちを、背中を押してもらえるような場があると嬉しいです。
- FD委員会の存在に関するテーマ
- 共通教育(教養教育)について
リベラルアーツ教育について

教員

- 「英語で学ぶ」第2回をお願いします。
- 鹿大の国際化のための取組
- 英語学習の方法(教員向け)
- 教員のメンタルヘルス(ハラスメント対策)
- 教員の英語スキルを上げる支援
- 日本語での講義の教授法について
- 単位キャップ制の功罪
- Moodleの使い方やネット教材などテクニカルな話題
学生の悩みや理解
- ITを利用した教授法について
- 著作権についてのリスク対策
- 教室の設計と大学の設備に関して
- やる気のない学生のやる気を出すテクニックなど
- 共通教育での英語教育を見直すためのシンポジウムなど

4. おわりに

事後アンケートを見ると、ワークショップを有意義だと受け止めた参加者の割合は総じて高く、全体の93%が「非常にそう思う」または「少しそう思う」と回答しており、本ワークショップが貴重な機会になったことが窺える。

今後、「英語で学ぶ」授業の重要性を、より多くの学生、教員に理解してもらうためには、このようなワークショップに、さらに多くの参加者を得ることが必要であり、そのための方策についても検討すべきであろう。また、ワークショップで得られた様々な提案をこの場にとどめず、実際に大学側に提案していくためには、議論のテーマを明確にし、より建設的な提言を行うことをワークショップの目的とすることも考えられる。そのためには、各部署でのFD活動が大きな鍵を握る。本ワークショップに参加した教職員、学生が中心となって、ワークショップで得られた様々な提案と必要な取組が、各部署に波及していくことが、最も重要であるといえるだろう。

趣旨にもあるとおり、今後グローバル化のなか英語によるコミュニケーションの機会は拡大していくと思われるが、そうした社会に出ていく学生に少しでも有意義な学生生活を送ってもらうために、今回のワークショップの成果が活かされることを切に願う。

(文責:教育学部 中嶋 哲也)

鹿大版FDガイド第8号、第9号の発刊にあたって

平成26年度は、9月に第8号「パワーポイントを効果的に活用する」、2月に第9号「アクティブ・ラーニングとは？」を作成、刊行した。

担当ワーキンググループでは、今年度のFDガイド作成方針として以下の2点を重視することとした。FDの重要性を教員が認識あるいは再確認するきっかけとなるような内容とすること、文字量を多くせず、より具体的な表現を用いて各教員が日々の実践に活かしやすい内容とすることを重視することである。

第8号では、パワーポイントの活用法について取り上げた図表や授業の要点を分かりやすく示しやすいといった利点からパワーポイント活用が普及する一方、授業が一方的で単調になりやすいといった問題点も指摘されている。そこで第8号では、パワーポイントの特徴や活用上の注意点を指摘した上で、具体的な工夫の仕方を示した。

第9号では、本年度のFD・SD合同フォーラムや新任教員FD研修会のテーマも考慮し、アクティブ・ラーニングを取り上げた。これは、アクティブ・ラーニングが重要だとたびたび耳にするものの、その定義が曖昧であり、各教員がこれまで個々に行ってきた授業運営上の工夫との違い及び共通点も分かりにくい現状に対する問題意識に基づくものである。今回のFDガイドで取り上げた内容は具体的な工夫の一部に過ぎないが、学生が能動的に学修を進めて目標を達成できるような授業運営につながることを願う。

なお、テーマの検討にあたっては、授業時間外学修時間の促進や授業の運営方法と教室デザインの関係等、様々なテーマ案が挙がった。授業時間外学修を促すには、図書館やラーニング・コモンズ等、学生が学修できる環境を教室外にも整備していくことが必要となる。また、アクティブ・ラーニングを促すためにペアやグループでの活動等を積極的に授業に取り入れる際には、可動式の机・椅子の配置が望ましい等、教育成果向上のためには教室環境の充実も必要である。こうした学修環境デザインについては、FDの文脈に収まりきれないため、FDガイドで扱うのは困難と判断した。しかし、より高い教育成果を挙げるための重要な課題であることから、別途検討が必要だと考える。

(文責:教育センター高等教育研究開発部 伊藤 奈賀子)

FDガイド第8号



FDガイド第9号



大学IRコンソーシアム・アンケートの実施

1. これまでの経緯:「鹿児島大学共通教育における学習実態・学習成果に関する調査」からの発展的移行

本学では、2010年度から3年にわたり、「鹿児島大学共通教育における学習実態・学習成果に関する調査」を行ってきた。同調査は、次の2点の把握と検証を主な目的とするものであった。

- ①共通教育科目等を受講する学生の実態の把握、特に学生の基礎知識がどのようなものか、どのような学習ニーズをもっているか
- ②本学がこれまで行ってきたさまざまな教育改善の活動がどのような成果として現れているか

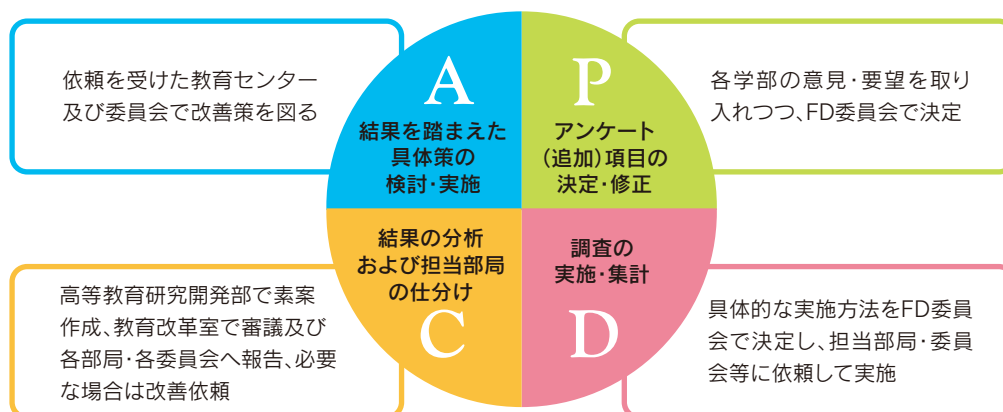
これらの結果については、2010～2012年度の本学FD報告書において既に述べた通りであり、本学学生の実態を明らかにするものとして一定の成果を挙げた。しかし、本学独自の調査であったことから、他大学の学生と比較しての本学学生の特徴は明らかにできなかった。また、学生が本学に在籍している期間中に一度だけ行われるものであったため、学生の学修成果の伸びを測ることができなかった。

こうしたことから、本学は2012年度に大学IRコンソーシアムに入会した。大学IRコンソーシアムでは、加盟大学が共通のアンケートを実施するため、他大学の結果との相互比較が可能である。また、1年次調査と上級生調査という2種類があることから、学修成果の伸びを測ることも可能である。まずは加盟した2012年度に200人、2013年度は500人の1年次学部学生を対象として、教育センターに依頼して試行的に1年次調査を実施した。

2. アンケート結果への対応策検討に関する組織体制の整備

しかし、この間、アンケートの実施に当たっての組織体制の整備や結果の活用方法に対する議論が充分行われてきたとは言いがたい。効果的な教育改善のためには、学生の状況を的確に把握し、それに基づく改善策を着実に実行していくことが必要であり、今後も継続的に同調査を実施予定であることを鑑みても、アンケート実施に関する組織としての運営体制および結果を踏まえた教育改善のサイクル確立は喫緊の課題であった。

こうした状況を踏まえ、平成25年7月より、教育担当理事より指示を受けたワーキンググループにおいてこれらの諸課題について検討が行われ、同年11月本学における大学IRコンソーシアム・アンケートの活用に関する答申が示された。そして、平成26年1月、答申の内容を受け、教育改革室において「大学IRコンソーシアム学生調査に関する実施要領」が決定された。運営サイクルは下図の通りである。



3. 平成26年度の大学IRコンソーシアム・アンケート実施について

運営サイクルが確立されたことを受け、本年度はこれまで実施してきた1年生調査に加え、上級生調査を実施することとした。対象は3年生500名である。実施に当たってはFD委員を通じて各学部にてアンケートを依頼した。1年生調査は1年次の秋に実施されるため、主として共通教育に対する見解や学修成果が示されるのに対し、上級生調査については専門教育の成果も踏まえた結果が示されると考えられる。現在は、調査結果の集計を行っている段階であり、結果が明らかにされた後は丁寧な分析を行い、本学における教育改善へと活かすことが求められる。

一方、2013年度に実施した1年次調査の結果からは、加盟国公立大学グループと比較したところ、本学の学生についていくつかの顕著な特徴が現れた。国公立大学には、北海道大学、お茶の水女子大学、大阪府立大学、長崎大学、琉球大学が含まれる。

中でも大学として改善を図る必要性が高いと考えられたのは、以下の3項目である。

- (1) 希望通りの履修ができない学生の多さ
- (2) プレゼンテーション能力の伸びを実感できない学生の多さ
- (3) 授業時間外学修時間の短さ

図1から明らかなように、(1)については、突出して大きな問題がある現状が明らかになった。1年次の秋というアンケート回答時期を考えた場合、この結果の原因は共通教育にあると考えられることから、対応策の検討を教育センターに依頼した。

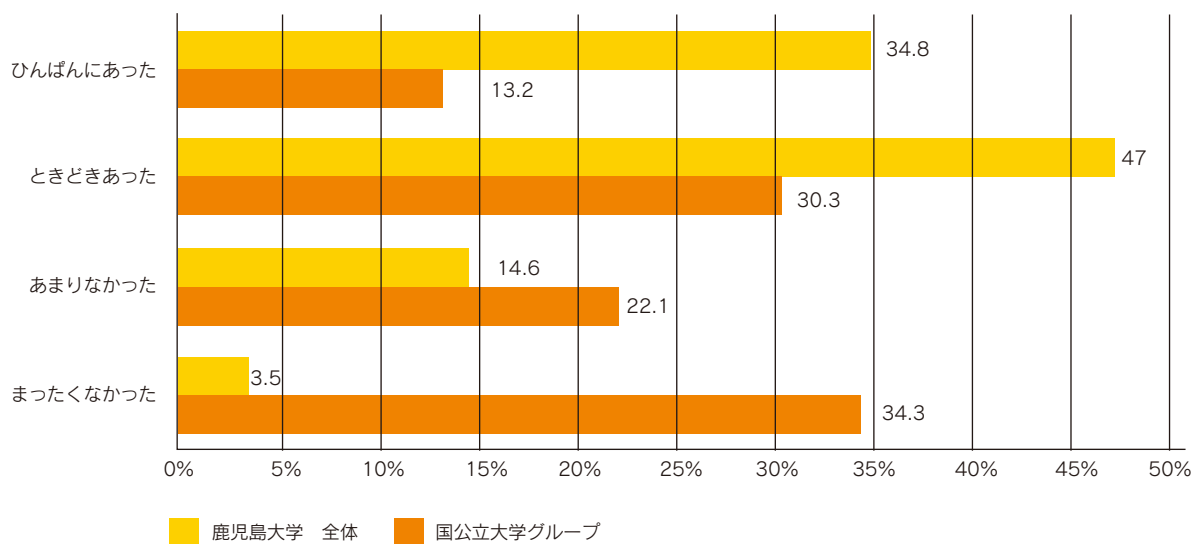


図1 授業経験:取りたい授業を履修登録できなかった

教育センターでは、履修登録後の抽選漏れ学生数や講義の開設時間帯の偏りなどのデータ分析を行い、2015年度は抽選漏れ学生数が極めて多い一部科目の前後期開設や開講時間帯の移動等を各教員に依頼して対応することとした。しかし、これらの対応は対症療法的なものにとどまるものである。学生が必要な能力を身に付け、目標を達成できるようにするためには、カリキュラム全体の見直しが必要である。本年度から教育センターでは、2016年度からの開始に向けた共通教育カリキュラム改革を進めているところであり、新たなカリキュラムの発足時にはこうした問題の解決が図られていることが望ましい。

(2)については、本学学生のみで顕著な特徴とまではいえないものの、能力に自信が持てない学生の割合が高いことが図2から明らかになった。プレゼンテーションに限らず、人前で意見を述べたり、分かりやすく説明したりする能力の向上を図るには、そうした学修機会を積極的に設けていく必要がある。本学学生は、こうした学修経験そのものが他大学の学生と比べて少ないことも図3から明らかになった。このため、カリキュラム全体と通じて話し合ったり発表したりするような学修経験を保証していくことが求められる。

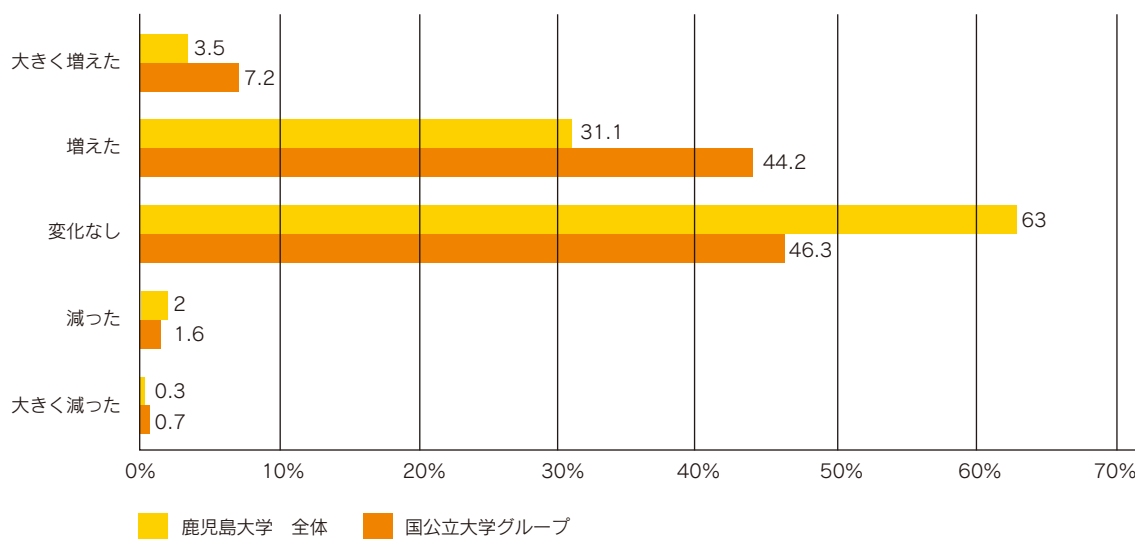


図2 入学後の能力変化: プレゼンテーション能力

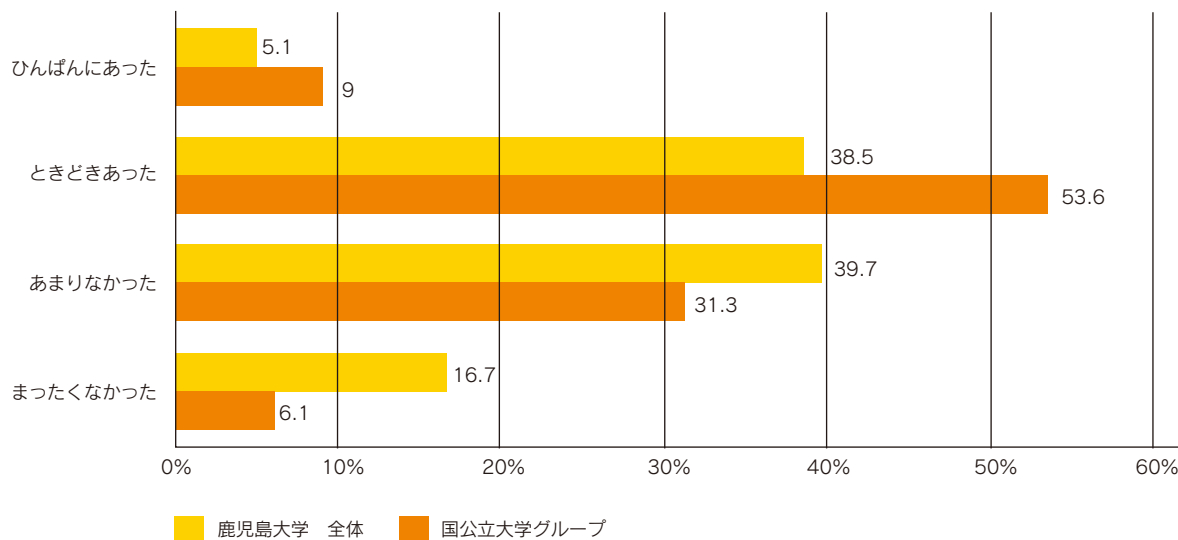


図3 授業経験: 学生が自分の考えや研究を発表する

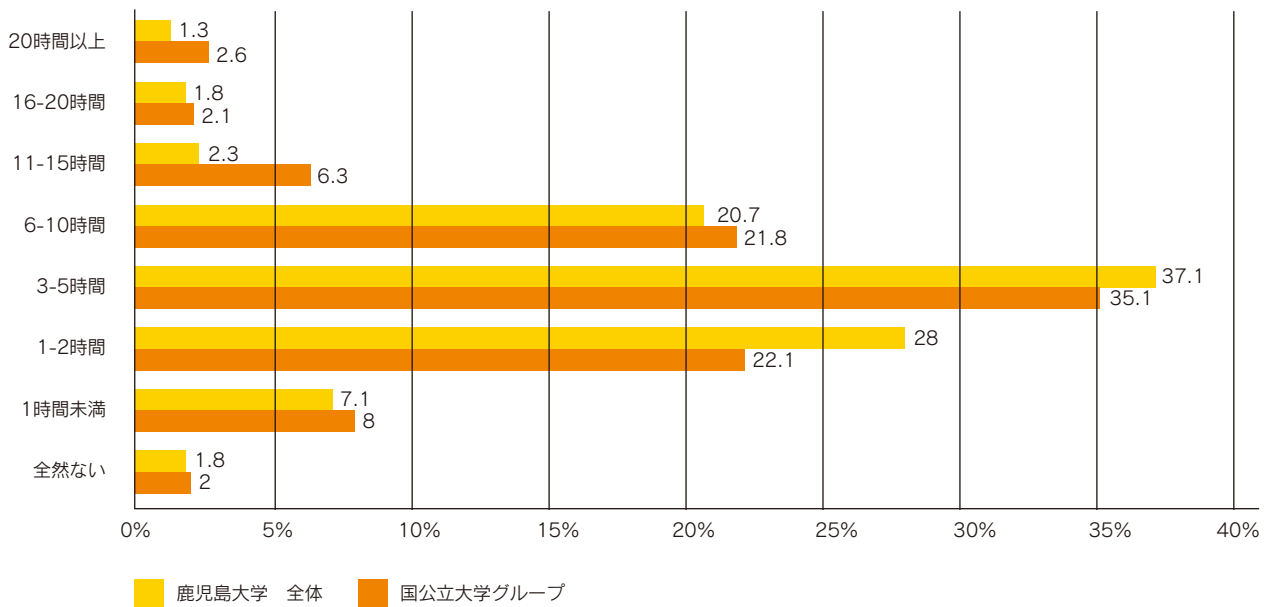


図4 週あたりの活動時間:授業時間以外に、授業課題や準備学習、復習をする

そして、(3)については、本学に限らず我が国の大学生全体についてたびたび指摘されている大きな問題である。特に本学学生に関しては、他大学と比べて全体的に授業時間外学修時間が短い傾向にあることが図4から明らかにされた。

授業時間外学修時間の短さは、学生が十分な学修成果を挙げ、卒業生の質を保証するためにも非常に大きな問題である。また、単位制度は教室内だけでなく教室外での学修時間をも含めて設計されていることから、単位の質保証という観点からも課題となっている。この問題も(2)と同様に個々の教員が自身の授業だけで対応しても根本的な解決とはならないため、組織全体として対処する必要がある。鹿児島大学において開講されている全ての科目が単位制度の趣旨に則った形で運営されるよう、単位の質を保証した教育の実現に向けた努力が一層求められている。

(文責:教育センター高等教育研究開発部 伊藤 奈賀子)

教育センター高等教育研究開発部(共通教育)のFD活動

1. はじめに

平成26年度の高等教育研究開発部は、前年度からの引継ぎ事項及び教育センター年度計画を基に以下のような活動を行った。

- ・授業アンケートの実施(中間アンケートを含む)
- ・授業改善メモの集約及び教育センターホームページ等での報告
- ・共通教育の授業公開・授業参観の企画・実施
- ・大学IRコンソーシアム学生調査の分析

これらのうち、「大学IRコンソーシアム学生調査の分析」は、別項で記載される。また、当初は恒例になっている「教育センターオープンクラスの企画・実施」も行う予定であったが、授業開始後、数回目の講義を一般の方に聴講していただき、その感想等をアンケートで収集することが、授業改善にどれだけ役立つかを議論した上、本年度は行わない事にした。

2. 授業アンケート

共通教育で行われるアンケートは、授業の途中で行われ、その結果を授業担当者が見て授業改善に活用する「中間授業アンケート」と、授業終了時に行われて結果を全学的に集約する「期末授業改善に資するアンケート」の二つがある。中間授業アンケートは、途中まで受けた学生の意見を聞くことによって、後半の授業に生かすことにねらいがある。なお、独自の方法で担当教員が中間アンケート等を行っている場合には、「中間授業アンケート」を行う必要は無い。

全学的に集計が行われる「期末授業改善に資するアンケート」は平成26年度に、前期が対象科目数429のうち356科目、後期が同351のうち264科目で実施された。なお、Moodleによってアンケートを行った科目は前期が71で、後期は43であった。集計結果を見ると、「学習目標を達成できましたか」の設問に対し、「そう思う」または「強くそう思う」との解答が多く、学生の自己評価は高いと考えられる。ただ例年どおり、「授業に関連した内容について自主的に学習しましたか」の設問に対しては、「あまりそう思わない」の解答が他の設問と比較して極端に多かった。

なお、平成26年度後期からは設問内容に関して幾つかの変更を行った。まず、近年はシラバスの内容を分かり易く作成することについては各教員の合意が得られており、シラバスそのものについても共通教育企画実施部会等でチェックが行われている。一方、シラバスどおりに授業を行っているかどうかについては実態が不明なことから、講義用及び実験・実習用授業アンケートのQ3「シラバスからこの科目の学習目標は理解できましたか」を削除し「授業はシラバスどおりに進められましたか」に変更した。また、回答する学生の誤解を防ぎ、適切なデータを得るため、講義用授業アンケートのQ7及び実験・実習用授業アンケートのQ6「授業の構成や進め方は適切だと思いましたが」に文言を追加し「15回全体の授業の構成や進め方は適切だと思いましたが」に修正した。修正前の質問文では、15回行われる毎回の授業それぞれの構成や進め方を問うているのか、15回全体の授業の構成や進め方を問うているのか、不明確であったためである。

3. 授業改善メモ

「期末授業改善に資するアンケート」の集計結果は、共通教育担当教員に送付され、各担当教員はそれに基づいて「授業改善メモ」を記載し、高等教育研究開発部会に提出される。高等教育研究開発部会では「授業改善メモ」を集約・分析し、webサイトで公表するとともに、多くの授業担当教員に役立つと判断された重要な「従業改善メモ」の内容は、教育センター共通教育企画実施部を通じて、各科目委員会に提出された。26年度にWeb掲載された「授業改善メモ」のまとめは、平成25年度後期末と平成26年度前期末に行われた授業アンケート結果に基づくメモを集約・分析したものであり、以下に掲載する。

(1)平成25年度後期末 「授業改善メモ」のまとめ

I 【授業改善に向けての試みや工夫】(文責:歯学部 菊地 聖史)

授業改善メモに記載されていた様々な試みや工夫の中から、一般的に役立つと思われる記述を高等教育研究開発部会の委員が分担して抽出し、さらに、文責者の判断で次の5項目に分類した。なお、整理の都合上、表現を簡素化したり、類似の記述はまとめたりするなどの編集を行っている。また、分類が必ずしも適切ではないかもしれないが、ご容赦いただきたい。

- (1) 学生に授業への興味を持たせ、参加を促すための試みや工夫
- (2) 学生からフィードバックを得て、それを活用するための試みや工夫
- (3) 資料等に関する試みや工夫
- (4) Moodleに関する試みや工夫
- (5) その他、教育効果を高めるための試みや工夫など

(1) 学生に授業への興味を持たせ、参加を促すための試みや工夫

- 学生が興味を持つようなテーマを設定する。
- 学生に役立つようなテーマを設定する。
- 一定のテーマを決めずにテーマから学生に考えさせる。
- 学部にあった内容を取り扱う。
- 授業が単調にならないようにする。
- パワーポイントやビデオなどの視聴覚教材を使用する。
- 最新の話題や具体的事例などを取り入れる。
- 教材に関連した幅広い話題を提供する。
- 座学だけでなく、体験実習を行う。
- 専門家などから現場の声を直に聞く機会を設ける。
- 学生が自らの意見や疑問点などを発言できる機会を設ける。
- 授業中に発表や意見交換の機会を設ける。
- ペアワークやグループワークなど、共同作業を行わせる。
- ロールプレイを取り入れる。
- 教員が話す時間を減らし、学生が話す時間を増やす。
- 学生に相互評価させる。

(2) 学生からフィードバックを得て、それを活用するための試みや工夫

- 質疑応答の時間を設ける。
- 質問をして内容理解の確認をする。
- 分からない学生がいないか確認をしながら進める。
- 授業の最後に確認テストを実施する。
- 授業の最初に復習テストを実施する。
- フィードバックシートや出席票に授業の感想や質問、要望などを記入させる。
- 双方向の授業形態によって受講生の不満や問題点を掌握する。
- 中間アンケートに率直に記入してもらう。
- 中間テストを行う。
- 顔を合わさずに質問できる場も設ける。
- 学生が質問や相談をしやすい雰囲気を作る。
- 次回の授業で質問に答えたり、補足説明したりする。
- 学生の質問や意見、要望等を授業に取り入れる。
- 宿題を出し、コメント付きで返却したり、授業中にコメントしたりする。
- 助言や指導のための時間を確保する。
- 成績不良者へ個別指導する。

(3) 資料等に関する試みや工夫

- 授業で用いるスライドと同じ内容の資料を配布する。
- 必要に応じて資料に書き込めるように配慮する。
- できるだけ多くの画像資料を用いる。
- カラーの資料を用意する。
- 最新のデータや分かりやすい図表を用いる。
- パワーポイントを効率的に利用しつつ、受け身にならないようにレジュメも組み合わせる。
- 例示に用いるデータは、なるべく異なる専攻分野の学生が全員興味を持つようなものにする。
- 穴埋め式の資料を配布する。
- 問題演習だけでなく、ワークシートも使用して、授業にメリハリをつける。
- 各自が発展的な学習に結びつけることができるように参考資料を紹介する。

(4) Moodleに関する試みや工夫

- 授業で説明したスライドや資料、課題やその結果等をすべて公開する。
- 授業内容を補うための多くの資料を掲載する。
- 資料は必須なものとは高度なものとの別を明示し、学生のレベルに応じて活用できるように配慮する。
- 活動記録(授業内容やプリントに対する感想や質問、練習問題の進捗状況など)を書かせ、それらに対して可能な限りコメントを返す。
- 授業に対する質問や意見を提出させ、そのすべてに対してコメントを加え、さらに、それらを全受講生が閲覧できるようにする。
- 教員コメントを閲覧したかを確認する復習確認の義務を課す。
- レポートを提出させ、評価点をつけて返す。

- レポートの提出状況や評価を学生自身が確認できるようにする。
- 毎回の小テストや練習問題の詳しい解説を載せる。
- Moodle上でのディスカッションを利用する。
- 国際的な催し、留学、研修の案内などを紹介する。

(5) その他、教育効果を高めるための試みや工夫など

- 学生のレベルに合った易しめのテキストを用いる。
- 時間内でテキストをすべて終わらせるのは難しいため、時々学生に授業で取り上げる項目を選ばせる。
- 予習課題として次回の講義内容のキーワードを調べさせ、まとめたものを提出させる。
- 予習課題の成績評価を行うことにより予習を促す。
- 予習を指示し、次回に小テストを実施する。
- 小テストを授業時間内にTAに採点してもらい終了時に返却する。
- 毎回あるいは随時、授業の到達目標を示す。
- 毎回復習しながら、新しい項目を導入する。
- 1回の授業の新しい学習項目を2つまでに抑える。
- 到達度が学生自身で分かるよう、レポートを課す。
- レポートの取り組み方に自由度を持たせ、個々の学生が能力を発揮できる可能性を提供する。
- 復習テストや中間テストを実施する。
- 当たり前のことを当たり前を実施する(ノートを見ずに講義する)。
- 学部を越えて誰とでも活動できる座席とする。
- 語学だけでなく、文化も教える。
- 教員自身が学生時代に苦手な点をどのように克服していったかを話す。
- 複数の教員のオムニバスにより、資格取得に必修化された科目の範囲をカバーする。
- オムニバス形式の授業においては、担当教員間で意見交換を行う。
- 毎回最初に、「あなた自身が、当事者でこういう状況の時、どう判断し、どう行動するか」という形の設定課題を出す。
これによって、その回の講義内容の必要性や意義について、各学生が理解しやすくなる。また、同じ設定課題に最後にも回答してもらい、学生の判断がどう変わるかを集計し、次回紹介する。
- 複数の教育内容をバランスよく複合的に教授できる様に、授業内容や時間配分に気をつける。
- 知識を得るだけでなく、自分の語学のスキルを上げていくための方法について紹介する。
- 自己の語学力向上に努力する。
- パソコンの実習だと学生は聞いているふりをして何もしない場合があるので、授業内容を細かにファイルに保存させ提出させる。

II 【授業改善に関連した意見・要望等】(文責:医学部 下敷領 須美子)

授業改善メモに記載されていた内容の集約方法については、前項の「授業改善に向けての試みや工夫」と同様である。ここでは、授業改善に関連した意見・要望等に記されていた内容について、文責者の判断で、意見の多かった順に5項目に分類し、紙面の関係上、表現を簡素化し、類似の記述はまとめた。また、分類・意見要約が必ずしも適切でないかもしれないが、ご容赦いただきたい。

(1) 学生アンケートと授業改善メモに関して

- 学生アンケート集計時、授業内容が異なるもの(例えば、実習Ⅰと実習Ⅱ)を一緒にすると分析しにくい。
- 知識を与えるのではなく、スキルを教える外国語授業用のアンケートをおこなってはどうか。
- 学生のアンケート結果をみることは、自分の授業の反省や改善に役立つ。
- 内容が易しくレポートや試験などの負担が少ない授業のアンケート結果が高くなる傾向も見受けられるため、教員の授業見学シートの活用など、異なった視点からの取組も必要。
- 授業中に告知したがアンケートの回答が少なかった。授業時間を割いてまでしたくない。
- 授業の質は教員に依存している現状であるため評判の良い授業はこの授業改善メモの提出を免除してもらいたい。
- このアンケートは役に立たない。
- このアンケートも教員の負担が増えているだけではないか？
- 授業改善メモは授業を客観的に振り返るよい機会となっている。続けてほしい。

(2) 組織的取組による教育改善の提案

- TOEIC、英検などの基準を設け、卒業要件とする。
- クラス編成を学力(習熟度)別にする。
- 教育センターで「反転授業」について議論してみたらどうか。
- 各科目分類での教員間の意見交換があると良い。
- 学生の自習時間の不足について対策を考える。

(3) 備品等環境整備の要望

- スクリーンを使用しても板書できるよう移動式ホワイトボードを備えてほしい。
- タブレット端末を接続したいので、HDMI端子で接続できるようになると助かる。
- 教室において、机や椅子の配置、形状、教師の位置等は、授業を左右する大きな要素である。キャスター付きの机、椅子等、自在で多様な教室空間が作れる「可動式」の教室が導入されることを望む。(事務部から整備を検討しているとの返答)

(4) 情報提供の要望

- 共通教育改革について非常勤講師にも知らせてほしい。
- 優秀な教員の授業を見学したい。

(5) その他

- 教科書を教員が自由に選定できるようにしてほしい。(英語)
- 授業準備に費やす時間の確保のために、教員一人当たりのコマ数を減らす、無駄な会議を無くす。

以上のように、授業改善に関するさまざまな意見が寄せられた。「1.学生アンケート・授業改善メモに関して」は、実施について疑問の意見もあったが、具体的な方法改善の意見、授業改善に活かされているという意見もあった。統一的に行うことで生ずる負担感と内容・方法の制約への対応が課題となる。「2. 組織的取組による教育改善の提案」には、具体的な提案が記され、教育センターによる検討だけでなく、教員間の意見交換につなげたい。「3. 備品等環境整備の要望」

は、個別の意見ではあるが、アンケートによって吸い上げられ、検討・対応することで教育全般の改善につながる。「4.情報提供の要望」は、教育改革に関する情報の浸透が不十分であることを示している。共通教育に関わらない教員は、さらに、情報への関心も低くなりがちで全学的な教員の参画を促すためには、更なる情報共有が必要と思われる。

(2)平成26年度前期末 「授業改善メモ」のまとめ

I 【授業改善に向けての試みや工夫】(文責:工学部 本間 俊雄)

各教員から様々な試み・工夫が挙げられた。授業科目によりそれらの試み・工夫には分野独自の内容がみられる。しかし、ここでは以下の3の観点から、授業科目による独自性を排した共通項目に絞りまとめることにする。ただし、3つの項目は、便宜的に分けたものであって、互いに関連し、独立なものではない。

- (1)学生に授業への興味を持たせ参加を促すための試み・工夫
- (2)個々の学生に対応した試み・工夫
- (3)授業をコントロールする試み・工夫

なお、3つに分類できないものは、4.その他として扱う。また、「板書を工夫する」、「レポートを毎回課す」、「小テストを毎回課す」、「独自の資料を配布する」などの普通の授業で実施されるべき内容やそれらに対応する一般的に考えられるものは、記載を省略した。

(1)学生に授業への興味を持たせ参加を促すための試み・工夫

学生の興味を喚起させるには、如何にモチベーションの低い学生に対して、授業に集中させるかが問題になる。これに対しては、「文化的な話題を取り入れる」、「ゲームや文化の紹介等を導入する」などの授業に関連する話題の挿入、あるいは「当該トピックに関連するDVDを視聴する」、「DVDをテキストにする」、「CD、DVDという視聴覚機材を使用」などと映像や音を見聞きさせることで、勉強意欲を向上させる工夫が多かった。映像の視聴は、単に興味を喚起させるためだけでなく、「具体的イメージを持った学習」や「理解を深めるために」にも利用されている。英語授業で、「毎回テキストに入る前に、簡単な日常表現を課題に指定したスキット(創作から実演まで)とスピーチ(質疑応答まで)に取り組んだ。」との学生に緊張感を持たせた工夫もある。

教科目にもよるものの、受講生が集中できる快適な学習環境(授業に参加し易い雰囲気)の向上を図るためには、「使う教材を選んでもらい、さらにそのどのユニットを勉強したいか選んでもらった。」、「グループ・ディスカッションを取り入れて、考える作業が楽しくなるようにした。グループ内で適切なピア・サポートが見られた。」、「最新の、かつ生徒が興味をひかれるような実際に日常で使っている内容の資料を用いるよう常に考えている。」などの報告もある。

英語の授業で既習事項が身についているかの確認では、「2~5名(5~10数組)を指名し、会話、寸劇を試みている。」あるいは、「世界各国からきた留学生の協力の下、多様性のある英語にも慣れるとともに、英語で自由に自分の意見を表現できるように、できるだけQ&Aの時間をとれるようにしている。」との実践に即した試みもあった。

興味を喚起させることではないが、「出席取りを授業の最初と中間に分けて行い(学生の眠気を取るため)、その中間での出席取りの際に、授業前半のポイントについて、パワーポイントで問題、そして解答を提示し、学生の学習効果が高まるよう努力している。」との試みもある。

(2) 個々の学生に対応した試み・工夫

通常、講義であると1対1の対応が難しい。この困難を克服する試みに、「毎回学生のライティングを添削し、コメントを付け返却することで個々の改善を図る。」「クリップボードに小さな紙を挟んで巡回し、個別の対応の折に、その小さな紙に走り書きメモ、ポイントなどを手短かに書いて渡すなど、個々の学生のかかえる問題点に対応した」、「テキストの練習問題は毎週自宅学習をさせ、回答を配布して自己採点をして提出させている。自宅学習で理解できなかった点はEメールまたは授業後に尋ねるようにさせている。」「受講生全員に対し、Moodleを通じ、各講義に対し、ミニッツレポート(約500字)及び、復習確認の2種類のレポートの提出義務を課す。ミニッツレポートに関しては、各人のレポートに対し、担当教員からのコメント(100字から500字程度内容によって異なる)をつけ、全てのレポート(名前は削除)と担当教員のコメントを、Moodleを通じて受講者全員が閲覧できるようにしている。更に、レポートを読んで、各人へのコメントの中に示したキーワードを提出させている(復習確認)。」「講義中に記入させるシャトルカードで、次の講義時間にピックアップした意見紹介や質問への回答などを行うことにより、意見の共有や自己の思考の発展など、受講学生の満足感にもつながっていたようである。」「ミニッツペーパーを取り入れ、講義で大切だと思ったことや質問を記入させており、共通するような大事な質問については、次の講義の最初に答えるようにしている。」との報告があり、教員への負荷が生じる。

教員の過度な負荷が生じない手順とした工夫には、「3名ずつのグループを作り、テーマについての情報交換、また相互の進捗状況の確認やレポートのチェックなどをディスカッションの形でさせている。」との事例もある。

Eメールを用いた質問の受付を明記した報告も幾つかあったが、学生が質問させる雰囲気を作ることの方が難しくうである。

授業時間内の個々への対応では、「毎回、黒板に答えを書かせ、学生の文章を添削した。また、何パターンか解答が考えられる場合には、そのバリエーションも提示した。」がある。しかし、ここまでが限度のようである。

面白い工夫としては、「期末試験の際に手書きのノートもしくはメモについて持ち込み可としている。試験対策になるようなノートやメモを作成することが授業の振り返りにつながれば良いと考えている。」があり、コピー世代やコピー機が安価で利用できる現状では、勉強させるのに良い手かもしれない。

(3) 授業をコントロールする試み・工夫

授業の進行に関する試みとしては、「活動する時間を多くできるように、ペアワーク、グループワークなどを取り入れた。」「1回の授業に新しい学習項目を2つまで抑える等、進度のコントロールをする。」「効率を上げるために、単語等の解説は前もって配布したプリントにて板書の代用をしている。」「情報端末室にてMoodleを使い、授業を行った。また、グループによる発表やプレゼンの機会も多く与え、知識の蓄積のみに終止することがないように授業を行った。」「教科書と連動したe-learning教材を課題として毎週行わせた。」等がある。面白い試みとして、「毎時間前回の授業の理解度をはかるための小テストを実施し、授業時間内にTAが採点、授業の終わりには返却している。」があり、学習効果が高いように思われるが、その分TAの負担が増す。

(4) その他

科研に関連する以下の記載があった。

- カリキュラム理論では、社会構築主義、それと連動し、英語教授法では、communicative approachの時代から multiple literacy へとグローバル化により、急速にシフトしている。科研との関係もあり、この領域の理論・実践面の検証と実践を積み上げている。
- 科研(前回採択=大学英語カリキュラムの評価方法の確立関連)(今回=アクティブ・ラーニング介入による自律学習構築へのカリキュラムデザインのあり方)と照応しながら、授業改革に従事。協同学習と教員の支援scaffoldingについて、より精緻なアプローチを構築し、授業実践に応用し、検証している。

II 【授業改善に関連した意見・要望等】(文責:共同獣医学部 松尾 智英)

授業改善に関連した意見・要望等に記されていた内容について、前年度に倣って下記の5項目に分類することにした。分類が適切でないものが含まれるかもしれないがご容赦頂きたい。また、類似の記述はまとめたが、意見・要望については文責者が簡略化すべきではないと判断したものについてはそのまま記載した。

(1) 学生アンケートと授業改善メモに関して

- 中間アンケートはよいと思う。その時点での学生の反応が分かる。
- 自分の授業を振り返る機会になると思う。
- 中間アンケートには、自己の弱点、教えてほしいところ、要望等を素直に書かせて、それらに基づいて、授業の修正をするようにしている。
- 学生との意見交換が必要と感じているので、中間アンケートは役立っている。
- 質問Q2-Q15(14項目)のうち、能動学修(アクティブ・ラーニング)に係る、学習者の自己評価=Q10の1つのみ。他=教員&授業評価。明らかに学習者の自律性Learner autonomyと自己調整学習self-regulated learningのパフォーマンスはどうであったか、自己検証させる情報(質問)が足りない。これでは自己省察(反省的実践家)=アクティブ・ラーニングの基底部分を育成することができない。
- 毎回、このアンケート自体に根本的な疑問をもっている。手抜きの授業を教員にさせないために、一定程度の緊張感を与えるには良いと思う。だが、(中略)教員が真面目にやっても、難し過ぎて満足度の低いこともあれば、教員が手抜きで、DVD再生と精神論だけでも、全く中身がない講義に高評価をすることもある。
- 学生が喜ぶ講義と教育機関として施すべき教育は異なるものであると思う。安易にアンケート結果にひきずられるのではなく、今後も教育者としての良心に基づいた教育をしていきたい。
- 学生の評価が高い講義が良い講義な訳ではない。このようなアンケートなどを推し進めれば、教員は自衛手段として学生に媚びる講義をするようになるだろう。

(2) 組織的取組による教育改善の提案

- 平成25年度に実施した共通教育改革については大変結構と思う。長期にわたってみると、授業の担当者が替わり、新しい授業が開設されていく。この過程で共通教育の目標や位置づけが少しずつですが変わってくる。それをこのような形で理念も実態も再検討され前進されるのは良いことだと考える。
- 初修外国語の位置づけについて、①実際に使える②日本とは異なる発想法、文化等を知る。①②両立が理想であるがなかなか難しい。どこに重点を置くかでクラスの規模も異なると思う。①に重点を置くなら、可能な限り少人数で、②ならそれなりの人数でも構わない、など。
- 都合の良い仮定だけで組み立てた理論で「改革」を行っても、実際におきることは理論通りとは限らない。結果まったくの逆効果となることもしばしばある。(中略) 本学におけるFDのとりくみの必要性は理解するし勿論協力もするが、(たとえばアンケート結果の使い方等を含めさまざまな面において) 今後も充分慎重かつ抑制的であって頂きたいと思う。
- 科学英語(理)で扱った内容を何故大学に入学してからすぐに教授されなかったのか。そのために「学習ガイド」とか「生活ガイド」みたいなものを作成したり講習会を開いたりするのが適切な対応かと思う。
- 本気で英語運用能力を高めるためには、集中的に学習できるような時間割・語学研修の設定など、語学教育の抜本的な改革が必要であろう。
- 学生の評価を高めたかったら、簡単な内容のみを講義し皆に単位を出せば良いだけである。このままでは、大学の講義が講義ではなく“単位をあげるための儀式”程度しか意味がなくなってしまうように思う。鹿児島大のアンケートや共通教育改革にはこれらの視点が欠落しており、意味のあるものにはなっていないと感じる。FDや“改革”など世の中の流れと対外アピールとして行う必要は理解するが、極力影響のないように配慮して頂きたい。

(3) 備品等環境整備の要望

- 成績ポイントが下がったが、去年は受講生が33人で小クラスだったが今年は55人に増えたせいかもしれない。
- 受講制限をしなかったところ、例年100名前後であった受講生が、今年は200名を超えた。授業環境として好ましくないと考えられ、試験や採点、成績の処理等で大変な負担が発生した。来年度にむけて受講制限をするか、講義を分担する教員と検討する予定である。
- Moodleをうまく使えば、学生の要望にきめ細かく対応できるだろう。しかし、「バーチャルな」対話だけが進んで、討論、特に質問の仕方のスキルが上がらないのは問題である。人間関係の構築に資さない結果になってしまうのではと危惧する面もある。
- Moodleでの回答を呼び掛けたが、受講者の2割程度しか回答していない。

(4) 情報提供の要望

- 授業改善メモを作成する際には、以前に提出したメモ内容も参考にしながら、経年的な変化も評価して記載している。アンケート内容が変化する場合もあるかもしれないが、できれば、過去のデータ(今回分と、過去2年分)も参照できれば、ありがたい。
- 一口に教養といっても、内容は理系科目から文系科目まで様々なので、大まかに分けられた結果があると、より自分の講義の改善に役立てられると思う。

(5) その他

- シラバスの英文表記や教員の英訳に対する不満も聞いているが、そういうことこそ、授業中での質問や要望の中で学生自身が解決する態度を身につけるべきではないかと考える。
- 教員側からの学生評価についてFDで集約しているのだろうか？ 学生側に学び方や学習態度の改善を求めるようなFDの取組があるのだろうか？

以上のように、授業改善に関するさまざまな意見が寄せられた。「1.学生アンケート・授業改善メモに関して」は、アンケートに肯定的な意見もあったが、一方で疑問視する意見も多く見受けられた。後者の意見は、学生の評価が高い授業が必ずしもよい講義ではない、学生自身の自己検証をさせる質問が必要、などの意見であった。「2.組織的取組による教育改善の提案」には、教育改革自体に対する具体的な提案もなされており、今後の建設的な検討のきっかけになればよい。「3.備品等環境整備の要望」は、今回は設備に対する要望は見受けられなかった。この項目に含めるべきか難しい内容ではあるが、Moodle利用の問題点や受講人数に対する意見が寄せられた。「4.情報提供の要望」は、アンケート結果のフィードバックに関する意見がいくつかみられた。その他も含めて、学生による教員(授業)の評価だけでなく、学生自身の学習態度などの検証を行うべきという考えが少なからずあることもうかがえた。

4. 授業公開・授業参観

平成26年度においては前期12科目、後期9科目の授業が公開され、参観教員数は各一名であった。なお授業参観者の多くは、特定学部が共通教育とコミュニケーションを図るための組織的活動の一環として参加した。教員の自発的な意思に基づく授業公開・授業参観への参加は低水準に止まっているのが現状である。

高等教育研究開発部会内では、各学部における授業公開・授業参観の実施状況を部会委員から披露していただき、改善案を検討する等を行い、教育センター会議等の機会に参加を依頼する等の活動を行ってきたが、自発的な参観者数の増大には繋がっていない状況である。抜本的な検討・改善が必要であろう。

(文責:佐久間 美明)

高等教育研究開発部会委員名簿

高等教育研究開発部長	佐久間 美明
教育センター 高等教育研究開発部	渋井 進、伊藤 奈賀子
法文学部	朴 源
教育学部	小柳 正司
理学部	内海 俊樹
医学部	下敷領 須美子
歯学部	菊地 聖史
工学部	本間 俊雄
農学部	紙谷 喜則
水産学部	庄野 宏
共同獣医学部	松尾 智英



II
鹿児島大学
の
FD活動

第2部
各学部・研究科の
FD活動報告